緋弾のアリア ―世界は俺のモノ―

黒羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア　―世界は俺のモノ―

【Ｎコード】

Ｎ２１９８Ｘ

【作者名】

黒羊

【あらすじ】

増加する凶悪犯罪に対抗する為、武力を行使する探偵『武偵』の存在が当たり前の社会。武偵を育成する東京武偵高校に通う普通の生活を求める少年、遠山　キンジ。転校してきた天才武偵神崎・Ｈ・アリア。そしてもう一人……。

志々島　蓮（前書き）

※注意点※

・作者は原作知らず。

・展開はアニメメイン

・情報はウィキ＆他の二次

・空白が多いのは携帯画面を考えて

・パソコンに慣れる練習でもあるので更新遅いっす

志々島　蓮

世界は狭い。世界は広い。

誰だって今自分が見ている以上の世界は存在しない。見えなければ無いのと同じだ。しかし実際には見えない先にも世界は続く。続いていく。

世界は広い。世界は狭い。

――しかしそんな事、志々島（ししじま）　蓮（れん）には関係のない事だ。世界が狭かろうが広かろうが、

「世界は、俺のモノだ」

スン、と蓮が鼻を鳴らす。

とあるビルの屋上。吹きすさぶビル風に乗って何やら嗅ぎ付ける。

寝転がっていた体勢から上体を起こし下を覗き込む。見つけたのは、自転車で爆走している少年を自転車から引っ剥がすピンク色のツインテール少女。直後、余力で走っていた少年の自転車が爆発する。

一連を眺めていた蓮は鼻をクンクンさせて、ニヤリとした。

「面白い匂いがするなぁ」

★

武偵高こと武偵高校はレインボーブリッジ南に浮かぶ南北およそ２キロ・東西５００メートルの長方形の形をした人工島。学園島とも呼ばれる。

武偵とは凶悪化する犯罪に対抗する為に作られた国家資格を持つ者。武偵免許を取得すれば武装許可、逮捕権の取得など警察並みの活動が可能となる。警察と違うのは、武偵はそれに応じて金を得るという事。その代り、武偵法の許す範囲ならどんな荒事でもこなす。

そして武偵憲章第一条にはこうある。≪仲間を信じ、仲間を助けよ≫。少女――神崎・Ｈ・アリアは、武偵としてそれに準じ自転車に爆弾を仕掛けられた不幸な少年を助けた。

しかし爆発に巻き込まれ二人して吹っ飛んだ先でその少年に服を脱がされ（誤解）胸をジロジロ見られた（過剰）とあって、アリアは今すぐにでもこの少年の頭に風穴を明けてやりたかった。

そこに水を差すように現れたのは、先ほど少年を追走していたのと同じタイプの短機関銃装備の自律型走車。それも６機も。

ひとまず少年への制裁は置いておいて自前のガバメントで応射していたのだが、一体何があったのか、少年の様子が変わった。

さっきまで同じ武偵にしては情けないと思うほど使えなかったのに今は、

『ご褒美だ、お姫様』とか。

『アリアを守る』とか。

こっちが赤面するセリフを涼しげに吐いている。まるでというか、完全に別人だ。

忠告も聞かずあっさり遮蔽物から身を晒す少年。６機の自走車はここぞとばかりに短機関銃を撃つ。

――正直、アリアは目を奪われた。

少年は短機関銃の弾丸を完全に見切り紙一重で躱し、懐からベレッタを取り出した。銃声は一発分。並みの者ならそう聞こえただろうが、Ｓランク武偵であるアリアはそれが６発を一瞬で撃ちきっていた事を見抜いた。

（――速い！）

目を凝らしていなければ見逃していた。そして射撃も精確だった。６発の弾丸は狂いなく短機関銃の銃口に吸い込まれ、自走車は残らず破砕した。

戻ってきた少年はおもむろに自分のベルトをアリアに投げ渡す。スカートのホックが壊れてしまい、アリアが遮蔽物から出て来られない事までお見通しらしい。

「こ、こんなんでさっきの事を有耶無耶にしようなんてさせないわよ！　それにあんな玩具、あたし１人でどうにか出来たんだからね！」

「それは悲しい誤解だよ、アリア」

気障ったらしい仕草を交えて喋る少年。

本当にさっきまで自転車で逃げ回っていた人物と同一人物なのかアリアは不安になってきた。

「「！？」」

気付いたのは二人同時だった。

新たな自走車がさらに１０機も現れる。しかしアリアも少年も遮蔽物から身を晒してしまっていた。少年の高速射撃があっても破壊しきれない。

短機関銃が今まさに火を噴こうかという瞬間、アリアは目を疑う光景を目の当たりにする。

――別の少年が空から降ってきた。

自走車の１機を踏み潰す形で現れた少年。一体どこから、どうやって。アリアは何一つ分からなかった。

自走車を粉々に踏み砕き、地面を陥没させる程の高さとなると相当な筈だ。まして一瞬見えた少年がパラシュートの類を装備していたようには見えなかった。――だというのに、少年は何事もなかったように平然と自走車の残骸を踏みつけて立ち上がった。

紅毛碧眼に長身痩躯。恰好はアリア達と同じ武偵高の制服だった。だが防弾効果のある制服なのに前をはだけさせて着ている為意味がない。

「……」

アリアはその少年から目を離せなかった。ただしこれは、先ほど超人的な技術を見せた隣の少年の時とは違う。アリアが目の前の少年から目を離せないのは――恐怖からだった。

★

蓮はビルからビルに飛び移り例の少年少女を追う。到着するとすでに一悶着あった後なのか残骸が散らばっていた。

つまらなそうに肩を竦める蓮だったが、上空からさらに１０機の自走車が二人に向かっているのを発見して笑みを取り戻す。躊躇わず、ビルの屋上から少年達のもとへ飛び降りた。

結果、１機の自走車を下敷きにするがそんな事蓮が気にするわけもない。気になるのは少年達だけ。

やはりというのか、警戒心丸出しだった。少年に至っては少女を守るように立ちふさがる。

しかしそれすら蓮にはどうでもいい。蓮が気になるのは少年達そのものであり、彼らの反応ではない。そんなもの蓮はどうでもいい。

「おい危ないぞ！」

少年の方が慌てたように叫ぶ。
自走車が突然現れた蓮を邪魔者と判断したのか、短機関銃を一斉に蓮へと向ける。蓮は群れの中央に落ちてきた形だったので逃げ場がない。

「危ない？」

短機関銃が一斉に射撃を開始。

「俺が？」

1機が崩れ落ちた。少年少女の目が驚きに見開かれ、蓮の右手に注目する。

蓮の右手に握られていたのは短機関銃。それも半ばからへしゃげ、最早使い物にならなくなっていた。

「俺が危ない？」

自走車は冷静に、迅速に、淡々と再び蓮に狙いをつける。しかしまた1機。今度は短機関銃を支える支柱が捩り切られる。

「俺は絶対に死なない」

そう言って蓮はまた1機破壊する。

「何故か？　それは此処が俺の世界だからだ」

まるで紙屑でも千切るように、銃を備えた鉄の塊を素手で蹂躙して

いく。

「俺が信じればなんでも出来る。俺が願えばなんでも叶う。だから此処は俺の世界なんだよ。だから世界は俺を中心に回ってるんだよ」

少年達は蓮が何を言っているのかわからない。ただただ、その圧倒的な『暴力』に魅せられていた。

「だから俺は死なない。絶対に……死なないんだ」

１０機がものの数十秒でスクラップにされていた。

傷一つ負わずに１０機の自走車を破壊した蓮。しかし彼は数秒後にはそんな事忘れてしまう。否、忘れる以前に、記憶するほど価値あるものではなかった。

蓮が少年達に視線を向けると、少年がより一層鋭い目つきでバタフライナイフを構え蓮を牽制しながら少女を庇う。しかし、そんな事にも構わず蓮は大胆に少年達に近付く。

「あ、あんた何者よ！」

震えが見える声で少女が叫ぶ。蓮は首を傾げた。

「武偵だけど？」

着ている制服を強調して『当然だ』というような蓮。クンクンと鼻が動いた。

「あれ？」

という声を少年が聞いた時、蓮はいつの間にか少年に顔を近付けていた。

「お前さっきと匂いが違う？」

「……っ！？」

蓮の接近に気付けなかった事に驚いて距離を取ろうとする少年。既にその時、蓮は今度は少女の首筋に鼻を近付けていた。

「甘い匂いだ」

少女はゾクリと体を震わせて顔を真っ赤にする。咄嗟に太もものホルダーから二丁拳銃を抜くが、蓮がその手を掴む方が速かった。強張る少女に顔を近付ける蓮。

「面白いな、お前」

「女の子に強引に迫るのは感心しないな」

背後から蓮の首に突きつけられるナイフ。蓮は尻目で少年と視線を交え、笑った。少女の手を解放する。

「お前じゃ俺を殺せない」

「なに？」

両の手をポケットに突っ込み、ナイフなど気にも留めないで蓮はそ

の場を立ち去った。

同居人パート2

蓮は久しぶりに武偵高への道を歩いていた。登校するのがいつ以来だか思い出す事も出来ない。といっても、既に日も沈みかけており、授業に出る気などさらさら無かった。

下校する生徒の流れに逆らう形で放浪する蓮。無軌道であるが無目的というわけではない。ようやくそれらしい人物の後ろ姿を見つける。

「峰（みね）　理子（りこ）ってのはお前か？」

唐突な上に不躾な問い掛けだが、何せ蓮は彼女の事を知らない。名前も昨日知ったばかりだ。

蓮の言葉に少女は足を止めると振り返る。ゆるいパーマのかかった長い金髪をツーサイドアップに結った少女。身長は昨日のピンクツインテール少女と良い勝負だが、胸に関してはこちらの少女の圧勝といった所か。

「あれー理子有名人？」

見知らぬ男子に話し掛けられても愛くるしい笑顔を振りまく少女。

「それともそれとも愛の告白？　キャー理子ってば罪な女」

「残念だけど告白じゃあない。腕の良い情報通は誰かって訊いたらあんたの名前が出て来たんだ」

「なーんだ。つまんない」

ぷー、と頬を膨らませる理子。

峰　理子。探偵科（インケスタ）Aランク。

いつも自前の改造制服を着ていて、発言も行動も馬鹿丸出しだが腕は確かだという噂だ。

「それで何が知りたいの？」

「人を探してる。ピンクのツインテール少女と、昨日自転車で爆死しかけた奴。どっちも此処の生徒だ」

「……ふーん。なんでその人達の事知りたいの？」

「面白そうだから」

両手を後ろで組んで無防備に蓮に近付いてくる理子。体を密着させて顔を寄せてくる。

「本当にそれだけ？」

その表情は数瞬前までの能天気さが消え失せていた。

蓮は自ら理子に顔を近付ける。下校時刻も過ぎて人が少ないとはいえ、見られでもすればあらぬ噂の一つや二つ流れそうな光景だった。

「わあ、大胆だね」

そんな事分かっているだろうに、理子の方も退かない。

「匂うねえ」

スンと鼻を鳴らして、蓮は理子の耳元に口を近付ける。

「俺、猫かぶってる女の子好きじゃないんだよね」

「！」

理子は素早い動きで蓮から距離を取った。

「あと香水も苦手」

どこまでもふざけた調子の蓮だが、理子の方はそれを失いつつあった。

「……お前、誰だ？」

「おいおい。探偵科のAランクだろ？」

口調まで変わった理子に対しても態度は変わらず、薄く笑う蓮。

「少し嘘が取れたな。そっちの方が好みだ」

飄々とした蓮の態度に苛立ったように、ギリリと歯を鳴らす理子。

「理子はお前なんか知らない。見たのも初めて」

「学校来ないからな」

「何で？」

「来る義理もないし。つまんないだろ」

『でもさ』と蓮は続ける。口元にうっすら笑みを浮かべて。

「最近楽しそうな奴等を見つけてさ。興味あるんだよ」

楽しいとか楽しくないとか、子供みたいな理由を語る蓮。だが理子は、蓮を前にして背筋に嫌な汗をかいている事を自覚する。内にあるサイレンが、眼前の男に対してけたたましく鳴り響いている。

「それ教えて理子に得あるの？」

「うーん。本当は金ならいくらでも払うつもりだったんだけど、お前別に金欲しくないだろ？」

本気で悩むような仕草を取る蓮。ややあって、蓮は結論に至る。

「なら、命を助けてやる」

「……っ」

冗談のような言い方で、しかし理子にはそれが冗談でない事が理解出来た。もはや懐の銃を抜く事すら出来ない。体が竦んでいた。

蓮の発言は理子のピンチを救ってやるという意味ではない。『今この場で、殺さないでやるから話せ』そう脅しているのだ。

「なあ、良い条件だろ？」

底抜けに穏やかな笑顔で蓮は言う。一歩、二歩と理子に詰め寄る。
理子は震える体に鞭打って両手を挙げた。
「……何が、知りたいの？」
蓮は歩みを止める。
「名前と学科だけでいい」
そんな簡単な情報と己の命が天秤にかけられたのか、と内心理子は悲しくなる。
「女の子の方は神崎・H・アリア。最近強襲科（アサルト）に転入してきたSランクの武偵。男の子の方は多分、遠山　キンジ。強襲科から理子と同じ探偵科に転科した。ランクはE」
「ありがとう」
ふんふん、と頷いて立ち去ろうとする蓮。
「待ちなよ」
理子の呼びかけに蓮は足を止めた。
「これじゃあアンフェア。お金は要らないけど、理子のお願い１つ聞いて」
震えを押し殺して絞り出した言葉だった。

理子の言葉はその通りかもしれないが、蓮は『情報の代わりに命を助ける』と言っている。つまりその提案を蓮が呑むと言う事は、理子の命を保障しないという事だ。

理子は今度こそ抜けるように懐の銃をキツく握る。

振り返った蓮は微笑する。

「やっとお前自身から本気の言葉が出たな」

「え？」

蓮が何を言っているのか理子には分からなかった。

「いいぜ。そういうのは好きだ。願いってのは？」

「それは……また今度」

最後に自分を取り戻した理子はウインクする。蓮は表情一つ変えずに応える。

「別にいいが、有効期限はないし保障も無いからな」

つまり、いつでもいいけど願いを聞くかはわからない。

蓮はそうして今度こそ立ち去っていく。

残された理子はその場にペタリと座り込む。強がりも限界だった。

『やっとお前自身から本気の言葉が出たな』

「……」

理子の耳に、この言葉が暫く残った。

★

遠山　キンジは帰路につきながらため息をつく。というのも、先日から厄介なネコが住み着いてしまったのが原因だ。

神崎・H・アリア。彼女が自分の命を救ってくれた恩人でもあり、現在一番厄介な人物である。キンジは手元の資料を眺める。この資料は今日、友人の理子に頼んで集めて貰ったアリアについての情報。

見かけによらず良いとこの貴族様であったり、双剣双銃（カドラ）のアリアと呼ばれるSランクの武偵であったり、クォーターであったり我儘だったりももまんが好きだったり……。後半の情報は自己収集でもある。なにせ彼女は今、家に住んでいるのだから。

勿論、キンジが招いたわけではなく許可したわけでもない。彼女が勝手に押しかけてきたのだ。それだけではない。アリアはキンジに『奴隷になれ』などととんでもない発言までしているのだ。

アリアは腕は最高ながら、未だその実力に見合うパートナーがいない。

そこでアリアはキンジに目をつけ、パートナーになるよう迫っているのだ。そして残念ながら、キンジはそれに心当たりがある。

普段の自分はお世辞にも良い腕とはいえない武偵だが、とある体質で、発動さえしてしまえばその実力がＳランクのアリアにも劣らない実力を発揮してしまう。

それをアリアに見られてしまったのだ。

しかしキンジはアリアのパートナーになるつもりはない。それどころか、武偵をこのまま続けるつもりもない。

「兄さん……」

武偵を続ける事に意味がない事を自分はしっているのだから。

ふと、資料を眺めて思い出す。理子にはアリアとは別にもう一人調査を依頼していたのだ。

あの時現れた赤毛の少年。たった一人で短機関銃を装備した１０機の自走車を破壊し尽くし、あの時の自分――ヒステリアモードの自分の懐にあっさり入ってきた少年。

その正体を知りたかったが理子でも調べられなかったらしい。正確には、情報は出てきたが全てあきらかな偽装だったらしい。彼についてわかったのは名前だけ。

それと理子はこんな事も言っていた。

『こいつには近付かない方がいい』と。

いつものお馬鹿キャラではなく、真面目な顔で。

そしてそれには直接相対したキンジ自身同意見だった。あの男は、危険だ。

「ま、好き好んで関わりゃしないさ」

なにせ自分は普通の生活を求めている。その為にもまず、家に住み着いている貴族様をどうにかしなくては。

現在の自分の家であり、男子寮の扉を開ける。期待はしていなかったが、未だ玄関に彼女の靴がある事に残念な気持ちになる。

「あ、あんたなんでここにいるのよ！」

その彼女が居間で大きな声をあげていた。しかしその声はどうやら自分に向けられているわけではないようだった。

一瞬の思考。この部屋を訪れる人物を検索してキンジは青ざめた。

さては同じ武偵でもある幼馴染とアリアが鉢合わせたのかと。

幼馴染への言い訳、アリアの説得。どちらも自分に可能とは思えないが、部屋ごと吹き飛ばされてはかなわないとキンジは命を賭して居間へと走る。

「違うんだ白雪！　こいつは――」

言いかけてキンジはやめた。否、喋れなくなった。

そこにいたのは二丁拳銃を構えて敵意丸出しのアリアと、予想外の人物。勝手にキンジの部屋に上り込んでいるばかりか、テレビゲー

ムをしている赤毛の男。
キンジは彼を知っている。といっても名前だけ。
「志々島　蓮……」
「おかえり、遠山　キンジ」
数分前に関わるまいと決めた筈の男が、自分の部屋で出迎えてくれた。

★

理子により目的の人物の名前を入手した蓮は、ひとまずキンジの部屋へ訪れた。二人の内なぜキンジだったかといえば、単純に情報が手に入った順。つまり理由はない。
訪ねたはいいが誰もいなかったので不法侵入したのも実にどうでもいい。
テーブルを挟んだ向こうでキンジとアリアが並んで座っている。
「なんだ。お前ら同居してたのか」
「ど、どど同居……！」

「違う」

半分冗談だったがアリアの方は面白い具合に顔を真っ赤にする反応をみせ、キンジの方は比較的冷静に否定してきた。

キンジの部屋に来たのは正解だった。まさか目的の二人が一緒に住んでるとは。

「その様子だと、二人とも俺の事調べたみたいだな」

蓮の言葉にアリア達は否定しない。

蓮がそうしたように二人が自分の事を調べるのは当然だ。

「志々島　蓮」

アリアの方が口をひらく。

「父親はアメリカ人、母親が日本人のハーフ。両親共に五年前に事故で死亡」

「自己紹介の手間が省けて助かるよ」

「これを信じろっていうの！？」

興奮したようにテーブルを叩くアリア。

「あんたが武偵に引き取られる形で入学したのがほぼ一年前。それまでなんの訓練も受けていないし、両親ともただの一般人！」

直接蓮の『力』を見ているアリアには信じられない。
改造人間だと言われればまだ納得出来るのに、蓮の経歴は普通に尽きる。明らかな偽情報だ。

「まだあるわ」とアリア。

「授業にはほとんど出ない。受けたクエストも入学直後の一度だけ。なのに！　あんたは2年に進級してる」

明らかな単位不足の筈だ。隣のキンジは知らない情報だったらしく驚いている。

「それ以上に納得いかないのはあんたの学科よ」

「学科？」

キンジが首を傾げる。蓮が続きを話すつもりがないことを確認して、アリアが答える。

「無所属（リベルテ）科なんて聞いた事ないわ！」

武偵は必ずその能力に応じた科に振り分けられ、それに応じた単位を取得していく。だから無所属科なんてものは存在しない。

しかし蓮は無所属科である。正確には、どこに振り分ければいいのか学校側が判断出来なかっただけなのだが、蓮は親切に説明するつもりはない。

「そんなことどうでもいいだろ」

テーブルに片肘をついて手に顎を乗せる。超然とした蓮の態度に、キンジ達は緊張感を高めた。

「しばらく俺とチーム組もうぜ」

「「はあっ！？」」

「それと俺、しばらく此処住むわ」

「はあっ！！？」

キンジの声が一際大きかった。

ファースト・ミッション・エンド

蓮は大欠伸をして起き上がる。見慣れない部屋に思わず頭に疑問符を浮かべるが解決。

「そういえば昨日からキンジの部屋に泊まってんだっけ」

自分で言い出したことながら忘れていた。

ぼさついた赤毛を掻きながら、寝ぼけ眼でざっと部屋を見まわす。キンジ達の姿はない。当然だ。登校時間は既に過ぎている。二人は学校に行っている筈だ。

勿論それは同じく生徒である蓮もなのだが、昨日アリアが言ったようにまともに登校していない蓮にとっていつも通りの朝だ。

起き上がり冷蔵庫へ。キンジの部屋だが躊躇いなく物色。牛乳を掴みパックのまま口に傾けた。

牛乳を飲みながら、蓮は昨日の事を思い出す。

★

「どいつもこいつも、俺は武偵を辞めるんだって言ってるだろ。だからお前らとは組まない」

蓮の『チームを組め』という言葉に頑なに反対したのはキンジの方だった。
どうやらアリアの方は蓮より一足先にキンジにアプローチしていたらしい。

「お前の意見なんか知るか」

「そうよ。あんたはあたしの奴隷なのよ？」

「お前ら……」

もはや我儘を通り越した蓮たちの自己中発言にキンジは頭を抱える。

「条件がある」

蓮とアリア、この二人は自分の手に負える相手でないと理解したキンジが人差し指を立てる。

「1回だけだ」

「1回？」とアリア。

「組んでやるが1回だ。最初に起きた事件を1件だけ一緒に解決してやる」

思案するアリア。やがて渋々というように頷く。

「わかったわ。その1件であんたの実力を見極める事にする」

「どんな小さな事件でも1件だからな。お前もそれでいいな、志々島」

「蓮でいい。――ま、なるべく大きな事件が起きてくれるよう祈るさ」

『不謹慎』とアリアに怒られた。

★

蓮は別にアリアのようにパートナーを探しているわけでも、キンジのように武偵を嫌っているわけでもない。

あの二人を見た時、蓮は心が躍った。それはそう、恋心に似たものかもしれない。

面白いと思った。それ以上の理由もそれ以外の理由も、蓮には存在しない。

一つ気になる事があるとすれば、出会った時とキンジの匂いが違う事。僅かな違いだが確かに違う。

匂いが変わるなんて事は初めてだ。

その原因を知るのもまた、蓮の楽しみの1つでもあった。

ポケットで携帯が振動している事に気付く。蓮は電話に出た。

『事件よ！　早く来なさい！』

出るや否や怒鳴り声。切羽詰まったその声に、笑みを抑えきれない。

「願いが届いたかな？」

信じてもいない神様に蓮は感謝しておいた。

★

「出迎えにヘリってのは気分が良いな」

通信方法をインカムに変えた蓮の第一声。

アリアからの連絡を受けて部屋を出ようとした蓮を彼女は制止する。

迎えが行くからそこで待ってろと。

直後、部屋に横付けされたのは車でも船でもなくヘリだった。

蓮がヘリに乗り込むと先客がいた。

長大な狙撃銃を背負うには頼りない線の細い少女。

「あんたも武偵？」

ヘリの音、プラスヘッドホンを着けたままの少女にお構いなく蓮は

喋りかける。

少女は無言だが、コクリと頷いた。

「俺は志々島　蓮だ。よろしく」

「レキです」

抑揚の無い喋り方。最低限の応答しかしない機械のようなレキに、しかし蓮は気分を害するどころか上機嫌だった。

クンクンと鼻が動く。

「あんたも良いな」

「……？」

レキは蓮の言葉の意味がわからず首を傾げる。が改めて追求するつもりも無いらしい。

キンジ、アリア、理子、レキ。

此処最近出会った人物達を蓮は思い浮かべる。

「こんなたくさん面白い奴がいるなら、学校ちゃんと行ってりゃ良かったかな」

『そういう事は事件が終わってからにしなさい』

再びアリアから通信。おそらくレキにも同様に声は届いているだろう。

『事件はバスジャック。ジャックされたのは武偵高の通学バス。犯人はおそらく武偵殺しよ』

武偵殺し。確か先日、キンジの自転車に爆弾を仕掛けてふっ飛ばそうとした犯人だったか、と記憶を検索。

「キンジ、ラッキーだったな」

『……うるせえ』

蓮の軽口にもキンジは曇った声しかあげない。

『あたしとキンジは今車でそのバスを追ってるわ』

「ああ、見えた」

ハッチを開けて蓮は下を覗き込む。法定スピードを無視したスピードで走る黒いバンが見えた。

『蓮はトンネルに入る前にあたし達と合流。車を止めるから――』

「いや止めなくていい」

振り返ると、レキがリュックサックのような物を差し出してきた。降下用のパラシュートだ。

「いらねえよ」

なんと、蓮はそれを受け取らずにハッチから外に身を投げ出した。

あっという間にヘリが小さくなる。近付いてくる黒いバンの屋根に、蓮は四つん這いで着地した。屋根が僅かに凹み、インカムの向こうから可愛らしい悲鳴。

恐る恐るといった様子で窓から顔を出したアリアと目が合う。

「よお」

「あんた本当に人間なの？」

最もな質問だったが、蓮は涼しい顔で言い切った。

「当たり前だろ？」

『ありえん……』とキンジが憂鬱な調子で言った。

止める時間が勿体ないという蓮の進言で、蓮が屋根に張り付いたまま車は走る。トンネルに入る直前にバスを視界に捉えた。

トンネル侵入直後、バスと並列に走っていた無人スポーツカーが短機関銃をバスに撃ち込んだ。けたたましい発砲音と共にバスのガラスが粉砕される。

無人車はさらにバスに向けて発砲しようという挙動を見せる。

「アリア、弾を1発俺に放れ」

蓮の言葉に対してアリアは一切質問せず、窓から弾丸を1発蓮のいる屋根に放った。

凄まじい空気抵抗をまるで微風のようにいなす蓮は、危なげなくアリアが投げた弾をキャッチ。それを素手で投げた。

いくら拳銃の弾とはいえ、投げて当たっても痛いで済む。ましてや車に当たった所で傷が残る程度だ。

──しかし、蓮投げた弾はまさに弾丸の如く空気を切り裂き、無人車の短機関銃に見事命中した。命中させたばかりか短機関銃の支柱が折れる。

「キンジ、ハンドル持ってなさい！」

言うよりも早く、アリアは上半身を窓から出す。ツインテールを靡かせて、双銃の引き金を引く。

銃弾は的確に無人車の後輪を撃ち抜く。コントロール不能となった車はスピンしながら壁に激突して爆散した。

「良い腕だ」

「ありがとう」

蓮の賞賛にアリアは微笑みで答える。

普段はアレだったが流石Sランク武偵。実力は伊達ではない。

「キンジとあたしでバスに乗り移るわ」
繋がっているインカムからキンジが喚いているのが聞こえたが、アリアも蓮も相手にしない。
「蓮はもしもの時の為に待機。運転変わってもらえる？」
「俺は運転が苦手でね」
嘘ではない。
「それに――客だ」
蓮が後方を見るよう二人に促す。背後から先程と同じ無人スポーツカーが3台接近してきているのが見えた。
「あれは俺がやる。時間を稼ぐから爆弾は任せた」
言うや否や、蓮はバンを蹴りつけて飛翔。何の躊躇いもなく。
鳥のように翼があるわけでもなく、ワイヤーで吊られているわけでもないのに、蓮に恐怖など一切見えない。
1台の無人車のボンネットに着地する。
車に装備された短機関銃の銃口が即座に蓮に向けられる。
発砲されるより先に蓮は銃口を素手で掴むと無理矢理短機関銃を別の無人車に向けた。
撃ち出された弾丸が青いカラーリングの無人車のどてっ腹に次々穴を穿つ。ガソリンに触れたのか盛大に爆発した。

次に黄色の無人車が、乗り移られている無人車ごと蓮を撃つ気なのか銃口を向けてくる。

蓮は再び跳んだ。飛翔した蓮を追って弾丸が撃ち出されるが、弾はまったく蓮に当たらない。結果、蓮は黄色の無人車に着地を果たす。

まるで驚愕したかのように発砲を止めてしまった短機関銃に、蓮は微笑みかける。

拳を振り上げた。

メキッ！　と凄まじい音をさせて、蓮の右拳が無人車のボンネットを貫く。肩まで突っ込んだ腕を引き戻して再び蓮は飛翔。数秒遅れで車が爆発する。

後方宙返りを決めて再び蓮は赤いカラーリングの無人車に戻って来た。

ぐるりと短機関銃が蓮を狙うが、石ころを蹴るような簡単な動作で支柱が折られ、銃は道路を転がって後方に消える。

蓮は高速移動する車の上を冗談のように軽やかに飛び移り、僅か数分で3台を無力化してしまった。

唯一の攻撃手段を失った無人車はただ走るだけ。その上で悪鬼のような笑みを浮かべて離れたバスを見る。まだ爆弾が解除された様子はない。それを眺めていた蓮の隣りを、４台目となるシルバーカラーの無人車が走り抜ける。――しかし、蓮はあえてそれを見逃して、走るだけとなった無人車に腰を下ろす。

蓮は別に人助けがしたいわけではない。武偵として働きたいわけで

はない。

「さて、お手並み拝見」

今はただ、自己の興味のままに。

★

犯人は装置を使ってバスを監視している。その見立て通り、キンジがバスの屋根をつたうと通信装置を発見した。

「アリア！　通信装置は外した」

「この馬鹿！」

車体下で爆弾処理をしていたアリアが顔を出すなりそう罵る。外に出るなという言いつけを守らなかった事を怒っているらしい。

「馬鹿とはなんだ。お前が爆弾を解体している間に俺はこっちを――」

「迂闊だって言ってるの！」

褒められたかったわけではないが、キンジは自分なりに出来る事を考えて行動した。そしてその成果があった。

なのに彼女は頭ごなしに怒るだけ。

「無防備過ぎるわ。早く車内に戻って！」

キンジは不満を堪え、通信装置を舌打ちまじりに投げ捨てる。――

その直後エンジン音。

見ると後方に追いついてきた無人車。

（無人車は蓮が相手してる筈じゃ……）

蓮の規格外の力に無条件に安心していたが、よく見ればあの無人車は最初の3台と別の色をしている。増援が来て取りこぼしたのかもしれない。

無駄な思考だった。そんな事を考えるより先にさっさと車内に戻るなり伏せるなりすれば良かった。

「キンジ！」

アリアの声で我にかえり気付いた時には、無人車の銃口がキンジの頭に狙いをつけた後だった。

「……」

情けなくも言葉も出なかった。ただ迫って来る弾丸をキンジは見つめる。

「キンジッ！」

体が押し倒される。飛びつくように胸を押したアリアがガバメントを抜く。

発砲。同時に耳元で風が裂ける。

アリアの放った弾丸は無人車のタイヤを破壊し、コントロール不能となった車はスピンして消えた。

安堵するキンジ。その胸に温かい感触がある事に気付いてハッとした。

「アリア？」

胸の中で、少女は額から血を流したまま動かない。

「アリア！　アリア！！」

何度も呼び掛けるがアリアは目覚めない。

『私は、一発の銃弾』

インカム越しに聞こえる儀式じみた詠唱。狙撃科Ｓランク、レキの声だ。併走するヘリから放たれた弾丸は、まるで魔法のように障害物をすり抜けて車体下の爆弾の留め具を破壊する。

東京湾に落下した爆弾が一瞬の間を置いて爆発。

水柱があがり、キンジ達に水を激しく打ち付ける。キンジにはまるでそれが、自分の愚かさを責めているように思えた。

腕の中で眠るアリアの血は、それでも綺麗に流れてはくれなかった。

亀裂

学園の屋上で寝転がる赤毛の美男。

「だーれだ」

「嘘つきだろ」

即答すると、蓮の目をふさいでいた手が退かされる。視線だけやると、隣で体育座りしている理子が不機嫌そうに睨んでいた。

「相変わらず嫌な奴」

普段の彼女を知る者からしたら信じられないとげとげした雰囲気。思わず腰が引けてしまいそうな眼光にも、蓮はどこ吹く風といわんばかりに無関心。

「バスジャック、レンレン達が止めたんでしょ？」

わざとらしいほどいつも通りのふわふわした声色で理子が言う。

バスジャックは止まった。負傷者は何人か出たが、死者も出ず、橋が爆破されるという大事故も起こらず事件は解決。武偵なので表彰される事などないが、蓮たちの働きはお手柄だった。

しかし彼女は別に、律儀に賛辞の言葉を持ってきたわけじゃない。ニイッ、と理子の口が妖しく歪む。

「でもアリア怪我しちゃったんだっけ？」

そう、アリアは事件の過程でキンジを庇って額に怪我を負った。幸い大したものではなかったが、傷跡が残ってしまうのだとキンジがわざわざ伝えに来た。キンジはキンジで悩んでいるようだった。

「それがどうした？　そんなこと言いに来たのかよ」

クスクス笑う理子は、寝そべっている蓮に重なるようにしなだれかかってきた。

「レンレンは冷たいねえ。理子の火照りも冷ましてよ」

そういって蓮のはだけた胸板に舌を這わせる。蓮の体にまたがって、妖艶な笑みで蓮を見下ろす。

「けどらしくない。怒ってる？　アリアが怪我しちゃって」

蓮は何も答えない。

「意外だよ。キー君ならともかくレンレンがそんなに怒るなんて。アリアが怪我したから？　武偵殺しに怒ってるの？　それとも、守れなかった自分に対して？」

理子が蓮の胸に頬を押し付ける。

「理子嫉妬しちゃう」

男なら理性とのせめぎ合いがある場面だが、蓮には一切動揺は見られない。理子にはそれが不満だった。

「全然楽しくなかった」

「え？」

「レキって子はそれなりに楽しめたけど、あの２人は全然駄目だ。正直失望した」

理子の言うとおり蓮は確かに不機嫌だったが、それは理子が言ったような理由からではない。

蓮はキンジとアリアが気に入って一緒にいる。基本的に周囲の目も声も、常識も法も、善と悪すら蓮の行動は縛れない。蓮の行動概念は彼自身の欲求に従っている。

そのほとんどが直感で、初めてキンジ達に出会ったときも、その直感が訴えたのだ。この２人は面白いと。

ただそれだけ。だがそれ以上の理由は蓮にはありえない。

だがバスジャック事件はその期待を裏切る形となった。アリアはつまらない事で傷を負い、キンジに至っては結局初めて会った時のような冴えた動きの一つもなく事件を終えた。

つまらない。事件の結果は関係ない。蓮にとって重要なのは過程。この前は不完全燃焼どころか、燻りの一つも生まれなかった。

「ならさ、レンレン……理子と組まない？」

くふっと理子は笑う。

「あの２人より理子の方が蓮の事満足させてあげられると思うよ？」

奇妙なニックネームではなく、『蓮』と名前で呼び本気を示す理子。

「それも面白そうだな」

「ほんとっ！？　理子嬉しい！」

満面の笑顔で抱きついてくる理子。『だが』と蓮は続ける。

「証明してくれよ。お前といる方が楽しいって」

ピクンと理子は反応を示し、しばらく沈黙を挟んでひっついていた体を離す。

「いいよ、見せてあげる。アリアより理子の方が上だって事」

理子の瞳に、今までよりさらに強い決意めいた炎が見えた。理子は胸元から1枚の紙を取り出す。チケットだった。ロンドン行の飛行機の。日付は今日。

★

武偵殺しはカージャック、バイクジャックから始めてシージャックである武偵を仕留めた。そしてそれはおそらく直接対決だった。なぜなら、その時だけ遠隔操作の電波が傍受されなかった。それはつ

まり、犯人自身がその場にいたから必要がなかったからだ。
そして多分今回の犯人はそれをなぞっている。
「どういうこと？」
銃を構えて先行するアリアが尋ねてくる。
「バイクに代わってチャリ。車に代わってバス。そして――」
船に代わってこの飛行機。
今、アリアとキンジが乗る飛行機が例の武偵殺しにジャックされている。狙いは相変わらず武偵。２人は犯人の挑発にのり、１階のバーに向かっている。
「でもそれがこのフライトだっていう確証は……」
「奴はかなえさん……アリアの母親に罪をきせた。これはお前への宣戦布告だ」
「最初からあたしがターゲットだったってことね。なめた真似してくれるじゃない」
アリアは歯を鳴らす。彼女が武偵として躍起になって犯人を捕まえている理由は、彼女の母が濡れ衣によって捕まえられているからだ。彼女はその犯人たちを捕まえたい。そしてその１人が、武偵殺しだ。
ようやくキンジ達はバーに到達する。バーカウンターには１人の女性が座っているのが見えた。

扉を蹴ってバーになだれ込み、キンジ達は女性に銃を突きつけた。

「ふふ、今回も綺麗にひっかかってくれやがりましたね」

その口調は間違いなく武偵殺しのものだった。女性は振り返り、顔に手をかける。

ビリビリと女性の顔が破け、素顔が露わになる。その正体に、キンジは動揺が隠せなかった。

「理子……？」

「ボンソワ。キンジ……」

その人物はキンジの友人であり、同じ武偵高の生徒である峰　理子だった。

「そして、オルメス」

「あんた一体……」

「理子・峰・リュパン４世。それが理子の本当の名前」

リュパン。それはあまりにも有名な大怪盗の名前、アルセーヌ・リュパン。

勿論本人ではない。彼女はその子孫。

「理子は理子である為に、お前を超える。どいつもこいつも私の事を４世４世……４様！

理子は理子だ！　お母様が付けてくれた名前がある！」

血を吐くように叫ぶ彼女の姿は、キンジが今まで知る彼女とはかけ離れていた。まるで別人のような……否、今まで知る彼女が本当の彼女ではなかったのだ。今の姿が彼女の本当の姿。

「イ・ウーに入ったのも、キンジをアリアとくっつけたのも全部その為」

「どういうことだ？」

「キー君のチャリに爆弾を仕掛けた時からって意味」

ウィンク混じりに理子は言う。

「あ、当然だけど、お兄さんの事件の犯人もリッコでーす」

キンジの手が震える。兄の仇が、いままで友人として付き合ってきた理子だったなんて信じたくなかった。しかし理子が言葉を紡ぐ度に、それが真実なのだと思い知らされる。

「……っ」

唐突に機内が揺れる。バランスを崩したキンジが転倒し、不覚にも銃を手放してしまう。額に、銃口が押し付けられた。

「ノンノンダメだよキンジ。今のお前じゃ戦闘の役には立たない」

悔しいが理子の言うとおりだった。今の自分では戦力にはなりえない。だが、彼女は違う。

「理子！」

アリアがガバメントの引き金を引いて飛び込む。それを予期していた理子も応射。

常に防弾服を着込む武偵同士の戦闘において、拳銃は必殺にはなりえない。近距離で威力を発揮する、いわば打撃武器。

力量は互角。同じ双銃。なら決め手は銃の装弾数だが、それはアリアが不利。

アリアと理子が、まるで演舞のように絡み合う。時折放たれる弾丸も致命傷にはなりえない。だが、アリアにはあって理子に無いものがある。

「キンジ！」

アリアの呼びかけに応じてキンジが飛び出す。懐から抜いたバタフライナイフをアリアが押さえつけた理子に突きつけた。

「終わりだ。理子」

喉元のナイフを一瞥して、理子は一つ呼吸を挟む。

「アリアと理子は色んなところが似てる。家柄、容姿、そして……2つ名！」

理子の長い髪が不自然に揺らいだ。キンジがそれに気付くより早く、理子の髪が触手のように動き腰のナイフを掴むと、アリアを切り裂いた。

「アリア！」

「くふ♪」

続けて至近距離から、理子はアリアに向けて躊躇いなく引き金を引いた。無情な炸裂音。

アリアの小さな体がゆっくり傾き、床に叩きつけられた。

「アリア！！」

激突

気絶したアリアをキンジが抱えて逃走する。しかし此処は飛行機の中。いわば空の監獄。逃げる場所などありはしない。

「勝てる……理子は今日、理子になれる！」

抑えきれない高揚感に哄笑をあげる理子。

今日此処で、アリアを倒し自分はようやく自由を手にする。

「ご機嫌だな」

掛けられた声に振り返ると、バーの一席に酒を瓶ごと呷る赤毛の少年がいた。一体いつからそこにいたのか、理子は気付かなかったが平静を装う。

「見ててくれたんだ。レンレン」

蓮は薄い笑みを貼り付けたまま、再び酒を呷る。

「オルメス。あの子がシャーロック・ホームズの子孫ってのは驚きだ」

ちらりと彼はこちらを見る。

「お前の正体も、な」

「どう思った？」

特に意味はない。好奇心からの質問だった。

「別に。俺はシャーロック・ホームズにも、お前の曾爺さんにも興味はない。
俺が興味があるのはアリアでありキンジであり、お前個人だ」

その返答は、理子には少し予想外の言葉だった。

いままで会ってきた人間は、理由はなんであれ祖先であるリュパン１世を知る過程で理子の存在を知り接触してきた。気に入らない事だが、本心ではそれが仕方ない事だと理子も理解している。

それだけ、自分の祖先が凄い人物だったのかを知っているから。そしてそれはおそらくアリアも同じだろう。

しかし、目の前の少年は偉大な祖先達をどうでもいいと言った。興味がないと。

そんな事を言う人間は初めてだった。

「それにしても、キンジはまだへっぽこのままだな」

憮然とした表情をする蓮。理子はゆるみかけた戦闘モードを引き締めて、いつもの不敵な笑みを作ってみせる。

「キー君まだヒスってないからねー」

「ヒスる？」

疑問符を浮かべる蓮に話してやる。キンジが必死になって隠しているヒステリアモードについて。そして、ヒステリアモード時のキンジこそアリアのパートナーたる資格を持つ男だという事を。

「ハハ！　なんだそりゃ」

蓮は腹を抱えて笑う。

「二重人格ってわけでもなさそうだが……。まあこれでやっと匂いの説明もつくってもんだ」

なにやら楽しそうな蓮だが、それを見ながら理子は決意する。そろそろアリア達を追わなくてはいけないが、それよりも先に。

「ねえ蓮」

理子の口調が変わる。それは彼女が本気になっている証だという事を彼も知っている。

理子は知らず唇を震わせて、言葉を放った。

「理子と組んで」

もしかしたらそれは、生まれて初めての『本音』だったかもしれない。

武偵としての理子ではなく。イ・ウーでも、勿論４世でもない。

峰　理子。ただの理子として初めての本音で、願い。

「さっきアリアと対峙してたお前は凄く良かった」

蓮は瓶をカウンターに置くとおもむろに立ち上がる。

「嘘のない、本音を曝け出したお前。だが自分で言ったように、お前自身がまだそれを認め切れていない」

無造作に近付いてくると、蓮が理子の耳元に顔を近付けた。その直前に、彼の鼻がクンクンと動く。

「舞台は整った」

この時、理子に確証はなかったが、蓮の言葉がキンジがヒステリアモードに入った事を意味しているのだと直感的に理解した。

「証明してこい。お前自身に対して。お前が理子だって事を」

キュッと、理子は唇を噛む。

やがて悪戯っ子のように無邪気な笑顔を振りまく。いつもと同じに。しかしどこか違っていたように、理子自身感じていた。なにが違うのかまではわからなかったが、不思議と良い気分だった。

★

再びバーに戻ってきた理子。自慢の長い髪が無造作に切られていた。

「勝ったか？」

彼女の表情を見れば良い結果ではないことなど瞭然であったが、あえて蓮は尋ねる。真意は勿論嫌がらせだ。

理子は口を尖らせて蓮を睨みつけるだけで質問には答えようとはしない。やはり結果はよくなかったらしい。

蓮の横を通り抜け、飛行機のハッチに爆弾を取り付けていく。おそらく逃げる算段だろう。その背に、蓮は再び質問を投げる。

「満足したか？」

「ぜんっぜん！」

今度ははっきりと答えが返ってきた。不満げに眉根を寄せる彼女が、いつもしている演技以上に子供っぽくて可笑しかった。

理子が逃走しようというのに、当然のことながら蓮は引き留めようともしない。理子は蓮の顔を見ないまま、小さく彼の名を呼ぶ。

「ねえ、蓮……。一緒に来て」

それは彼女がさきほどバーを出て行くときと同じセリフ。しかしあの時以上に切実な想いがありありと感じられた。本気でなければ、蓮に言葉が響かないことを彼女はすでに知っているから。

そんな理子の気持ちを全て察したうえで蓮は薄い笑みを浮かべて答える。

「断る」

「うそつき」理子は頬を膨らませた。

「アリアの情報あげる代わりに、理子のお願いひとつきいてくれる約束したのに」

「有効期限はないが、保障もしないって言っただろ」

「ケチ」

「まあお前も頑張ったからな。次会った時また、お願いってのきいてやるよ」

「どーせまた保障してくれないんでしょう」

無言の笑みは肯定だった。

「理子！」

ちょうどいいタイミングでキンジが到着する。いる筈のない蓮の存在に驚きは隠せなかったが、理子が逃走の準備をしている事に気付くと、意識を彼女に注ぐ。的確な判断だ。

「「え？」」

2人の隙をついて、蓮が爆弾など意にも介さず理子に接近する。そのまま、爆弾が取り付けられたハッチごとなんと蹴り破った。

即座にキンジが理子に銃を向けるが、蓮が邪魔で狙えない。

「これはサービスだ」

理子にだけ聞こえる声量で言うと、理子を機外へ放り出した。理子は自前の改造制服をパラシュートに変形させ、結果悠々と逃走を成功させる。
脱出の直前、理子もまた蓮にのみ聞こえる声で言った。

『理子、諦めないから』

最後の最後、彼女らしい不敵な笑みを取り戻す。雲の海に消えていく彼女を見送る蓮。

「どういうつもりなんだ？　蓮」

カチャリと音がたつ。蓮が振り返ると、険しい表情でキンジが銃をこちらに向けていた。

先ほどの一連の流れ、一見蓮が理子を追いつめ結果取り逃がしたように見えるが、見様によってはわざと逃がしたようにも見える。少なくとも今のキンジにはそう見えた。

それ以前に、蓮がなぜ此処にいるのか。いやそんなことより、蓮が今まで何をしていたのか。なぜ何もしなかったのか、という方が重要だった。

「お前は理子の仲間か？」

「……」

「イ・ウーのメンバーなのか？」

「だったらどうする？」

不敵に笑う蓮。

「もしそうなら、俺は武偵としてお前を捕まえる」

意思表示するように、キンジはトリガーに指をかけた。

「ヒステリアモードか」

「……理子に聞いたのか」

能力が露見してもキンジは冷静だった。

蓮は笑みが抑えきれない。目の前の人物はまるで別人だ。以前のバスジャックの時のような腑抜けた空気が微塵も感じられない。構えひとつとっても、隙がない。

「どうなんだ、答えてくれ」

「なあ、キンジ……」

キンジの質問には一切答えず、蓮は身勝手に口を開く。銃の脅威も疑惑も敵意も、何もかもを呑み込んで、蓮は――笑った。

「殺し合うか？」

「……っ」

キンジだったからこそ、ヒステリアモードのキンジだったからこそ

引き金を引かなかった。もし引いていれば、蓮は容赦なくこの僅かな間合いを潰し、躊躇いなくその力を解放していた。そのあまりにも危険な結果をキンジは回避した。

たまらない沈黙。キンジには永遠にすら感じられる沈黙。やがて堪えきれないというように、蓮が破顔した。

「うそ」

クツクツ笑う蓮。今までのプレッシャーがまるで夢だったかのように消え去るが、キンジは笑えなかった。

（嘘……？）

一体どこからどこまで？　何が嘘だったのか。

ヒステリアモードの自分が、何もわからなかった。しかし、ひとつだけ確かなことがある。あの時、あの押しつぶされそうなプレッシャーだけは嘘じゃない。真実だったと。

まだ冷たい汗が止まらなかった。

「ぼんやりしてていいのか？」

脈絡もない言葉にキンジが首を傾げる。蓮が顎で外を示すと、キンジもそれを発見し目を見開く。

「ミサイル！？」

爆音と共に機内が揺れた。

二度目の光景

ひとまずコックピットへと戻る蓮とキンジ。操縦席には似合うはずもない少女が座っていた。アリアだ。

「遅いわよキンジ……って蓮！？」

「よお」

屈託のない笑顔で応じる蓮。アリアはなぜ蓮が此処にいるのか、とか今すぐにでも色々と問いただしてやりたかったが、何より操縦で手いっぱいだった。でかけた言葉を呑み込み、操縦に専念する。

「理子は？」

「逃げられた」

もう片方の操縦席に座りながらキンジが答える。

「それにミサイルでエンジン４基の内、２基破壊された」

その事実に驚きを隠せないアリア。エンジンを破壊されてもいますぐ墜落するわけではないが、ここまでの大型旅客機の運転経験はアリアにはない。そしておそらくキンジにも。

「それだけじゃないな」

クンクンと鼻を動かす蓮。

「多分燃料が漏れてる」

「……まずいな」

燃料計を見るキンジの表情が険しくなる。数値はみるみる減少していた。

「保ってあと１０分かな。着陸させるしかないな、お前たちで」

まるで他人事のように愉快そうに笑う蓮に、さすがにアリアが噛みつく。

「あたしたちって……あんた運転できないの！？」

「乗り物は自転車だって乗れないよ」

なんでも超人的な事が出来るくせに肝心なところで使えなかった。歯を鳴らすアリア。不意に、通信が入る。

『こちら航空自衛隊関東方面司令部。聞こえるか？』

自衛隊という言葉にキンジ達が首を傾ぐ。通信の内容は以下の通りだった。

『羽田、成田滑走路は現在トラブルにより使用不能。その為我々が君たちを太平洋上にて安全確実に着陸出来るよう誘導する。繰り返す――』

「ここは従いましょう」

そういって操縦桿を指示通り傾けるアリア。その手が別の手で止められる。

「キンジ？」

「海の上で安全確実に着陸出来る場所なんてない」

キンジの言葉にアリアが息を呑む。

『よく覚えてたな、キンジ！』

「武藤か？」

通信に割り込んで来たのは、キンジ達と同じ武偵高の人間。キンジ達のクラスメートの声だった。

『政府はとっくにお前らの事を見捨ててる！　着陸失敗のリスクの方が怖えってな！』

『何を言っている！？　勝手な事を──』

『うるせえ！　武偵は武偵を見捨てねえ！　オレ達は一般市民だけじゃなく、キンジ達も助けてえんだよ！！』

通信機越しから聞こえる仲間の声が、キンジ達にはこれ以上なく心強かった。

『クッ……我々に従え！　従わなければ、撃墜の許可も出ている！！』

切羽詰って本音を出した男。誘導の為、と言っていた戦闘機も本来の役目はこの機の撃墜なのだろう。素人同然のパイロット以前に、これはただの旅客機。勝負になる筈もない。
どうする？　キンジとアリアが考えを巡らす。黙っていても、やがて燃料が尽きて墜落する。

「キンジ、それを貸しな」

「蓮？」

差し出された手。見上げれば、こんな状況でも笑みを絶やさない男の顔があった。
キンジは一瞬だが逡巡する。まだ蓮への疑惑は解けていなかったからだ。しかしだからと言って何が出来るわけでもなし、要求通り通信機を手渡す。

ヘッドフォン型のそれを手で持って、蓮は口元に近付ける。

「あーあー、聞こえてる？」

『なんだ貴様は』

こんな状況下で緊張感に足りない声に、自衛隊の男が怒りを押し込めた声で応える。

蓮は笑った。向こうには見えないであろうから、喋り方で伝わるようたっぷりと皮肉げに。

「いますぐあの目障りなハエをどけろ」

言葉を失ったのは本人以外全員だった。

「それとこの通信もだ。これ以上余計な茶々入れんなよ」

『き、貴様！　立場をわかっているのか！？』

「そうよ蓮！」

激怒する男と、焦った声を出すアリア。なにせ今、自分たちの命を握っているのは通信機の向こうにいる自衛隊なのだ。挑発して得なことなど何一つない。それなのに、赤毛の少年は辞めない。

「二度言うのは嫌いだが、もう一度だけ言ってやる。消えろ」

『……どうやら死の直前で気が狂っているらしいな。そんな人間がいるのではこれ以上飛行させることも出来ない』

口調は冷静に戻ったが男の声から怒気が消えない。これを理由に撃墜命令を出すつもりなのは明らかだった。

「死ぬ……俺がか？」

男の言葉にきょとんとした表情をする蓮。そして、囁くように小さく喉奥で笑い声を噛み殺し、しかし堪えきれなくなったように堂々と高笑いし始めた。男だけではない、キンジ達も本当に蓮の気が狂ってしまったのかと思った。

『どうやら本当に狂っているようだな。よし、パイロットに撃墜命令を――』

「志々島　蓮」

音が、死んだ。不自然な静寂に半ば死を覚悟していたキンジ達が不審に思う。やがて長い沈黙を挟み自衛隊の男が声を出す。

『……貴様今、何と言った？』

男の声が若干震えているようにキンジとアリアには聞こえた。

「二度言うのは嫌いだって言っただろ？　今の言葉で理解出来ないほどにお前が下っ端ならもっと上に伝えろ」

なぜだろうか、キンジにはわからなかった。だが蓮が名を名乗ったその瞬間から、彼と男の立場が逆転してしまったように感じられた。

「あぁ、それと……俺は仮にこれを墜とされても死なない。俺が俺の世界で死ぬことはありえない。だからお前がもし構わず撃墜するなら好きにしてくれ。そうしたら――」

アリアが怯えた。キンジも、冷や汗が止まらなかった。

「そこからすぐに逃げるんだな。俺はお前を地の果てだろうと追いつめて、必ず殺してやる」

そうして蓮の方が通信を切った。そのすぐ後、自衛隊の戦闘機が何もせず去っていく。そして遮断した通信機から二度と男の声が届く事もなかった。

「あんた一体……」

アリアの問いに、しかし蓮が答える事はなかった。

「そんな事より見ろよ」

蓮に促されて二人が下方を見ると、真っ暗闇のなか学園島の一か所だけがおびただしい光の道を作っている。仲間の光が、キンジ達を導く。

そう死ぬはずがない。操縦に専念する二人を背後から眺めながら、蓮は行く末を確認する必要すらないとばかりに機内に戻る。なぜならまだ、彼らには『死』の匂いは感じられない。

★

とあるビルの屋上で寝転がる赤毛の少年。見上げる空は、昨日の出来事が夢だったかのように青く澄み切っている。

ガチャリと扉が開けられる。やってきたのはショートヘアの少女。身の丈に合わない長銃を背負う彼女を、蓮は一度だけ見た覚えがあった。

「レキ、だったっけ？」

こくりと頷くレキ。感情を読み取らせない無表情で、彼女は蓮を見る。

「蓮さんは、行かないのですか？」

『なにが』とは蓮は問わない。しかしその質問に答える事もない。無視されたようなものだが、レキは特に気にした様子もなく淡々と続ける。

「アリアさんは今日帰ります」

蓮に驚きは、やはりなかった。

「キンジさんは行かれました」

まるで事務的な報告をするかのようなレキ。かくいう彼女は、そのアリアと共にいる時間はそれなりに長かったが此処にいる。

「この世界ってものは俺のモノだ」

寝転がったまま蓮は語る。レキは傍らに立ったままそれを聞く。

「俺が信じればなんでも出来る。俺が願えばなんでも叶う。だから此処は俺の世界。だから世界は俺を中心に回ってるといっていい」

それは幾度となく蓮が言っている呪文のような言葉。しかし別にそれがなにかの呪いであったり、ジンクスのようなものでもない。なんの意味ももたないただの言葉だ。だが、実際世界は彼の思うように回っている。──いや、回しているといった方が正しいかもしれない。

「そんな俺だが、別に俺は世界をどうこうしたいわけじゃない。王様になりたいわけでも、魔王にも英雄にも興味はない。むしろ肯定

する。自由を……個人の願いを、思いを、想いを、思想を、判断を、決断を、迷いを、嗜好を、葛藤を、決意を、覚悟を」

結局これもただの言葉だ。言葉遊びにもなってない無意味な言葉。それでも今の言葉を聞いて、得体のしれない赤毛の少年の一端にレキは触れたような気がした。気のせいかもしれないが。

「だから蓮さんはアリアさんを止めないということですか？」

蓮の言葉を聞く限りそういうことだった。上体だけ起こした蓮は笑って肯定する。

蓮の視線をレキも追う。人並み外れた彼らの目は、この屋上から女子寮の屋上を細かに捉える。ヘリから飛び降りる少女の姿。それを決死の表情で受け止める少年の姿。

「だから俺はアリアを止めるキンジを止めるつもりもない」

空から降ってくる少女。この場所からその光景を見るのは2度目だった。

二度目の光景（後書き）

割と重要報告

ここまで読んでくださってる皆様本当にありがとうございます。まだまだパソコンの扱いには不慣れですが、少しずつ慣れてきたので次話より書き方が大幅に変わります。
読みやすくしよう、と考えた試みですがもしかしたら逆に読みにくくなる可能性も無きにしも非ず。そこはまぁ、温かい目でお願いします。
この先もちょくちょく変わるかもしれません。

それと次作として『とある魔術』も書き始めるので、こちらの更新がさらに遅くなると思われます。ちなみに『緋弾』の構想は、アニメ分のストーリー＋オリスト一つで完結を考えてます。

以上！　それでは、次話もよろしくお願いします。

セカンド・ミッション・スタート（前書き）

なかなか此処のストーリーはネタが浮かびませんねぇ

セカンド・ミッション・スタート

「だからなんで、お前は此処にいるんだよ」

アリアを連れて帰宅したキンジの第一声である。彼の部屋であるそこでは、呑気に寝そべってゲームを堪能する少年がいた。防刃制服を、まるでホストのように大胆に胸元を開いて着る赤毛の少年、志々島　蓮。

「なんでって……酷いなぁ。同じルームメイトだろう？」

「誰が！」

キンジの言葉など意に介した様子もなく、蓮はゲームをやる傍らに置いた紙袋に手を突っ込みピンク色の饅頭を取り出しかぶりつく。それに反応したのは勿論アリアだ。

「あーー！！」

親が夜中にこっそり美味しそうなお菓子を食べているのを見つけた少女のような反応。続いて子猫のような潤んだ瞳を向けてくるのに気付いた蓮は、紙袋をアリアに差し出す。

「食うかい？」

「うん！」

即座に頷いたアリアは紙袋からももまんを掴みとると小さな口いっぱいに頬張る。なんとも至福そうな顔の彼女。蓮と目が合う。彼はニヤリと笑った。

「……っ」

キンジには何も言えなかった。この部屋は間違いなく自分の部屋だが、主導権が自分にあるのかと問われれば首を横に振る。同居（無理やり）しているアリアの権利が圧倒的だった。

ならば彼女に蓮を追い出してもらえればいいのだが、現在彼女は幸福感溢れる様子でももまんを食べている。尻尾でもあればご機嫌に振る勢いだ。つまりはまぁ、完全に餌付けされていた。

キンジ自身が強制退去させる手段もあるが、返り討ちは目に見えている。なにせ相手は生身で銃弾の嵐も爆弾も片づける本物の化け物だ。たとえキンジがヒステリアモードにあったとしても、一人では相手にならないだろう。

「よろしくな」

曇り一つない完璧な笑顔。しかしキンジは覚えている。この顔の裏

にある、ハイジャック事件の時見せたあの殺気を。

「オレはまだ信用してないからな」

キンジと蓮の視線が交わる。

『キンちゃーん！』

と、突如玄関の扉の向こうから悲鳴じみた呼び声。次いで決して常識的とはいえない勢いで何度も扉が叩かれる。

『キンちゃん！　キンちゃんいるんでしょ！？』

「呼ばれてるぞ」

蓮が玄関から再びキンジに視線を戻した時、キンジは携帯画面を見つめながらまさに真っ青という顔色で茫然としていた。

『開けるよ、キンちゃん』

一瞬、ホラー映画のワンシーンのように叩かれていた扉から音が消える。しかしすぐに新たな衝撃がやってくる。ただし今度はホラー

映画からアクション映画に変更したようで、扉は鍵を壊されるどころか一刀両断された。比喩ではなくまさに一刀両断。

扉を切り捨てた一本の刀。それを振るった人物は扉の前で佇む巫女服姿の少女。黒く長い髪がそんな彼女にはよく似合っていた。ただ今は、その長い髪がカーテンのように少女の顔にかかっていてよく見えない。

「し……白雪……」

「キンちゃん……」

地の底から聞こえる、幽鬼のような声だった。

「噂は本当だったんだね。アリアと同棲してるって」

「いや、違うんだ。これはだな白雪！」

「ううん。キンちゃんは悪くないよ」

「へ？」

文句のつけようのない完璧な笑顔だった。ただし、刀を構えていなければ。

「キンちゃんは騙されてるだけ！　こ・の、泥棒猫がぁぁぁぁ！！」

「んにゃ！？」

扉が叩き壊される事態になっても、ももまんに熱中していたアリアだったが、さすがに殺気混じりに刀を振り下ろされれば無視するわけにもいかなかった。

「天誅ー！！」

「なんなのよー！」

我慢の限界に至ったアリアも自衛の為ガバメントを抜く。部屋の中なんてことお構いなく発砲するアリアと、狂乱のあままに刀を振り回す白雪。その中心で慌てふためくキンジを尻目に、蓮は残ったももまんをくわえていそいそとゲームに向かう。

「賑やかだねぇ」

★

アドシアードとは、年に一度行われる一般の生徒も交えた武偵高の競技会。武偵高ならではの射撃や格闘技術を見せものにしたお祭りのようなもの。普通の学校の文化祭と運動会をごっちゃにした、といえばイメージしやすいかもしれない。
勿論それは今年も行われる。この時期になると競技の代表に選ばれた人間は練習を、そうでない者も受け付けやら役割を決めそれぞれ準備に動き出す。

だが、そんな学校の空気をあざ笑うように校舎の屋上で寝転がる赤毛の少年。当然のように蓮は学校行事のサボっていた。というか、普段の授業すら出ない彼がそんな行事に参加するなんてありえなかった。それでもキンジ達と付き合うようになってからはちょくちょく学校には来ている。来てるといっても、屋上で寝ているか、キンジ達が受けたクエストについてくる程度だが。
なのでこうしていつも通りこうして風に吹かれて昼寝をしているわけだ。

ガチャリと扉が開かれる音。アドシアードの準備で訪れた生徒かもしれないが、蓮は顔すら向けずやってきた人物の名を呼ぶ。

「レキか」

「蓮さん」

事実、屋上に現れた人物はレキだった。彼女は蓮の存在を認めると、見もせず言い当てられたことに対する驚きもなく一角に腰を下ろす。
最初から最後まで物音ひとつ立てない静かな動きだった。見れば見

る程非現実的な綺麗さをもった顔立ちである。元々整ったものであるが、彼女の不思議な雰囲気がそれを際立たせている。

バスジャック以来よく会うな、と思ったがたんにこの屋上でよく会う程度だったと思い直す。

「あんたもサボり？」

元々興味があった、という事もあって蓮は上体を起こすとレキに話しかける。レキは無言のまま首を横に振る。そうして取り出したのは長方形の箱。さらに開けて取り出したのはクッキーにも見える固形物質。カロリーメイトだった。

彼女はそれを水もなく黙々と口にする。

「それ、なに？」

「？　カロリーメイトですが」

「いやそうじゃなくて。それ昼飯？」

何を聞かれているのか理解出来ないように首を傾ぐ。

「栄養面の心配でしたら問題ありません。一日に必要な最低限の栄養素は摂取しています」

「そういうことじゃないんだけどなぁ」

どうやら彼女は随分ずれた子らしい、と自分を棚に上げた事を蓮は考えていた。実はこんな会話でも、レキを知る者たちからすればとても珍しい光景だったりする。基本無口無表情無感情、絶対的な狙撃技術のこともありロボットレキと呼ばれる彼女が、こうも普通に会話する姿は誰も知らない。
彼女が喋らないというより、会話する相手が独特な受け答えと間に堪えきれないだけなのだが……。

しかし今会話しているのはあの蓮であり、彼はレキを気に入っている。

「なら今度一緒に飯でも行くか？」

唐突にして大胆な発言だった。勇気と呼んでいいのかよくわからない蓮の行動。常人には耐え難い、筆舌にし難い空気が続く。答えるべきレキがなかなか口を開かないからだ。やがて、少女の引き結ばれた口がゆっくりと開く。

「はい。予定がなければ構いません」

なんと、レキは了承した。あのレキが。彼女を食事に誘って、さらにはＯＫを貰う。学園の大ニュースにも成り得る出来事が、誰の目もないところで淡々と行われ実現してしまう。惜しむらくは感動す

る人物がこの場に誰もいない事か。

「ん？　電話……アリアか」

取り出した携帯を耳に当てる。向こうからの要件が主で、蓮は『ああ』『うん』と適当な返事をしてしばらくして電話を切った。

「蓮さん」

今日初めてレキの方から蓮に話しかけた。

「何かありましたか？」彼女はやはり淡々と「何やら楽しそうにみえます」

「ん？　あぁ……」

蓮はいつもの獰猛な笑みを浮かべる。

「楽しいね。すごっく」

この日より、蓮たちの白雪護衛が開始される。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2198x/

緋弾のアリア ━世界は俺のモノ━

2011年11月2日03時22分発行